

中期朝鮮語における2つの補文節について

著者	小山内 優子
雑誌名	国立国語研究所論集
号	7
ページ	187-198
発行年	2014-05
URL	http://doi.org/10.15084/00000531

中期朝鮮語における2つの補文節について

小山内優子

東京外国語大学大学院 博士後期課程 / 国立国語研究所 言語対照研究系 非常勤研究員

要旨

本稿の目的は、従来の研究で置き換えが可能であると言われている中期朝鮮語の2つの補文節、即ち「連体形+形式名詞 to (こと)」による補文節 (to 補文節) と名詞形語尾-wom~-wum による補文節 (-wom 補文節) の棲み分けを明らかにすることである。『月印積譜』(1459年)と『法華経諺解』(1463年)を用いて調査を行った結果、to 補文節は主に知覚や知識に関する動詞の補語として現れるが、-wom 補文節にこのような制限はないことが明らかになった。特に al- (知る) の補語になる場合は to 補文節が用いられる傾向が顕著である。このような補文述語の偏りが見られるのは、テンス・アスペクト・ムードを連体形部分に表し得る to 補文節を用いることで、話者・書き手にとって補文節の命題が事実であることが示されるためであると考えられる。そのため al- (知る) のような命題の真偽を積極的に認める必要のある補文述語は to 補文節を選択するのである*。

キーワード：中期朝鮮語、補文節、補文述語、事実性

1. はじめに

中期朝鮮語では補文節をつくる方法として、「連体形+形式名詞」による方法と名詞形語尾-wom~-wum (母音調和による異形態。以下-wom¹) による方法がある。このうち、「連体形+形式名詞 to (こと)」による補文節 (以下 to 補文節) と名詞形語尾-wom による補文節 (以下-wom 補文節) は相互に置き換え可能であると鄭在永 (1996) らによって指摘されている。例えば次の (1) は、同一の漢文の内容が朝鮮語訳される際に異なる補文節で表されている例である²。

(1) 可以遊戯者噲法樂可以自娛也

a.	elwu nwony-e	nol-o-syo-li-la	hwom-on	法樂-i
	よく 逍遙する-ADVF	遊ぶ-LV-SH.ADV-F-DECL.IRR-FNT	する.NMLZ-TOP	法樂-NOM

* 本稿は、第15回理論・構造研究系・言語対照研究系合同研究発表会 (2013年11月12日、国立国語研究所)、第101回NINJALサロン (2013年11月19日、国立国語研究所) 及び、日本言語学会第147回大会 (2013年11月23日、神戸市外国語大学) での発表を基にしている。本稿については以下の方々から貴重な意見や情報をいただいた: Anna Bugaeva, 堀江薫, 井上優, 伊藤英人, 風間伸次郎, Prashant Pardeshi, 辻星児, John Whitman (敬称略)。また、用例収集には以下の方々で作成された電子データを使わせていただいた: 趙義成, 村田寛 (敬称略)。記して感謝の意を表したい。本稿における如何なる誤りも筆者の責任に帰するものである。

¹ Martin (1992: 931) では -wom を -wo と -m の2つの形態素として分析しているが、本稿では -wom を1つの形態素として捉える。

² 本稿では Modified-Yale Romanization を用いて例文を示す。略号は以下のとおり: ACC: accusative / ADVF: adverbial form / ATTR: attributive / BN: bound noun / CAU: causal / CNC: concessive / COM: comitative / COP: copula / DAT: dative / DECL: declarative / FNT: finite / GEN: genitive / HON: honorific / IND: indicative / INS: instrumental / IRR: irrealis / LOC: locative / LV: link vowel / NEG: negation / NMLZ: nominalizer / NOM: nominative / OBJ: objective / POL: polite / QUOT: quotative / REAL: realis / RET: retrospective / SH: subject honorific / SIM: simultaneous / TO: 形式名詞 to / TOP: topic / VOL: volitive

elwu cey culki-lq to-l kacolpi-si-ni-la
 よく 自ら 楽しむ-ATTR.IRR TO-ACC 例える-SH-DECL.REAL-FNT

「よく逍遙し、お遊びになるのだということは、法楽がよく自ら楽しむことをお例えになるのである」(月印釈譜卷十二 28 張)

b. elwu nony-e nol-o-syam-on 法楽-i elwu cey
 よく 逍遙する-ADVF 遊ぶ-LV-SH.NMLZ-TOP 法楽-NOM よく 自ら
culki-wum-ul kacolpi-si-ni-la
 楽しむ-NMLZ-ACC 例える-SH-DECL.REAL-FNT

「よく逍遙し、遊ぶことは、法楽がよく自らを楽しむことをお例えになるのである」

(法華経諺解卷二 68 張)

鄭在永 (1996) によると、このように同じ内容の漢文が to 補文節と -wom 補文節の 2 通りで翻訳されるのは、これら 2 つの補文節が類似した意味を持つためである。しかし、中期朝鮮語の文献を見る限り、如何なる環境においても to 補文節と -wom 補文節が相互に置き換え可能であるとは考えにくい。本稿では、2 つの中期朝鮮語文献から用例を集め、調査した結果、これら 2 つの補文節の棲み分けに「事実性 (factivity)」が関係していることを提案する。

2. 本稿で補文節と呼ぶもの

本稿での「補文節」とは、to 補文節と -wom 補文節の 2 つを一括して呼ぶための言わば便宜的な呼称である。既に述べたように、to 補文節は「用言の連体形 + 形式名詞 to (こと)」という連体節構造であり、-wom 補文節は名詞形語尾 -wom によって作られる名詞節である。以下では、中期朝鮮語の連体形 (節)、名詞形 (名詞節)、そして形式名詞 to について概観する。それぞれの術語は主に高永根 (2010) に従った。

2.1 中期朝鮮語の連体形 (節)

中期朝鮮語は現代朝鮮語と同様に -n と -l の 2 種類の連体形語尾があり、これらは凡そ現実／非現実で対立している。現実の連体形語尾 -n は -no (直説法)、-te (回想法) などのムード形態素³を前接することができる。一方、非現実の連体形語尾 -l の前にムード形態素が来ることはない。ムード形態素がついた連体形語尾を表 1 に示す。[] 内はそれぞれの形態素が表し得る代表的なテンスの意味である。

³ 現代朝鮮語に於いては、テンスやムードそしてアスペクトが各々独自の形態を以て現れるが、中期朝鮮語ではテンス専用の形態が無く、ムード形態素によって時制が表示される (高永根 2010: 269)。

表1 連体形の現れ方

	-n 連体形				-l 連体形
	不定法 [過去] (-Ø-)	直説法 [現在] (-no-)	回想法 [過去] (-te-)	確認法 (-ke-)	推測法 [未来]
-wo- なし	-(o)n~--(u)n	-non~-nun	-ten	-ken	-(o)l~--(u)l, -(o)lq~--(u)lq
-wo- あり	-won~-wun	-nwon	-tan	-kan	-wol~-wul, -wolq~-wulq

表中の-wo- という形態素についてはこれまで多くの研究者によって言及されているが、統一した見解は無いようである。この-wo- についての研究は、終止形・接続形・連体形に現れる-wo- を全て同じ形態素として捉えるもの（李崇寧 1960, 鄭在永 1994 他）と、終止形・接続形に現れる-wo- と、連体形に現れる-wo- を分けて論じるもの（許雄 1975, 中島仁 2002 他）がある。それぞれの立場の研究から比較的最近のものを挙げると、まず、出現環境の如何に関わらず-wo- を全て同じ形態素としてみる鄭在永（1994: 105）は、終止形・接続形・連体形に現れる-wo- は、「話者が命題に対して自身の感情や主観的判断をあらわすもの」としている。

一方、終止形・接続形に現れる-wo- と連体形に現れる-wo- を区別して考察している中島仁(2002: 100) は、連体形に-wo- が現れる条件を次のように述べている。

-wo- は基本的に動詞にのみ現れる。動詞に-wo- が現れるか否かには、①引用動詞であるか否か、②修飾部と被修飾語の関係、③アクチュアリティーの3つが関わっている。まず、引用動詞 ho- (という) の連体形には必ず-wo- が現れる (例2)。

- (2) 諸法-i-la hwo-n kes-un ilen 相-kwoa 性-kwoa
 諸法-COP-QUOT 言う.OBJ-ATTR.REAL もの-TOP このような 相-COM 性-COM
 「諸法というものはこのような相と性と」(釈譜詳節卷十三 40 張)

非引用動詞の場合は、修飾部と被修飾語の関係と-wo- の出現が関係する。被修飾語が修飾部の対象である場合は-wo- が現れる (例3)。被修飾語が「後」や alph (前) のような相対的な名詞の場合は-wo- が現れない (例4)。被修飾語が修飾部である動詞句の表す内容を受け、全体を名詞化する (名詞句を作る) 場合は基本的に-wo- が現れる⁴ (例5)。

- (3) 桓彝-uy pulywo-n 將軍 兪縱-i
 桓彝-NOM 遣う.OBJ-ATTR.REAL 將軍 兪縱-NOM
 「桓彝が遣わした將軍兪縱が」(諺解三綱行実図忠臣図 12 張)

⁴ 中島仁 (2002) ではこのような修飾部と被修飾語の関係を「名詞化のかかわり」と呼んでいる。本稿の考察対象である to 補文節はこの「名詞化のかかわり」に分類し得るものであると考えられるが、中島仁 (2002) では形式名詞 to が被修飾語となっている例については言及がない。また、to 補文節は連体形部分に-wo- が現れる例が稀であり、中島仁 (2002) が扱っている「名詞化のかかわり」とは振る舞いが異なる点も注目に値する。これについては今後の調査課題としたい。

- (4) ponay-n 後-ey-za kulihwo-ngi-da
 送る-ATTR.REAL 後-LOC-こそ そうする-POL-FNT
 「(夫を) 帰した後でならばそうしましょうと」(諺解三綱行実図烈女図 22 張)

- (5) ne mwot peythy-wo-n il-ol chuki neki-nwo-ni
 お前 NEG 切る-OBJ-ATTR.REAL こと-ACC 哀れに 感じる-IND.VOL-CAU
 「お前を斬ることができないことを心残りに思うのであって」
 (諺解三綱行実図忠臣図 13 張)

但し、①(引用動詞であるか否か)の場合を除き、修飾部の動詞句が指し示す動作や状態が特定の時間に現れない、つまり非アクチュアルな場合は-wo-は現れない(例6)。

- (6) 使者-non puli-si-n salom-i-la.
 使者-TOP 遣う-SH-ATTR.REAL 人-COP-FNT
 「『使者』はお遣わしになられた人である」(釈譜詳節巻六 2 張)

(3)と(6)はどちらも修飾語がpuli-(遣う)であり、被修飾語がその動作を受ける対象であるが、(3)は-wo-が現れているのに対し、(6)にはない。両者の違いは、(3)がpuli-(遣う)という動作を行う具体的な場面が想定できるのに対し、(6)のpuli-(遣う)は「使者」という単語を説明するためのみに使用され、その動作を実際に行う場面を想定していないという点である。つまり(3)はアクチュアルな動作を、(6)は非アクチュアルな動作を表している。

以上のことから、中島仁(2002: 100)は-wo-の機能を「アクチュアルな場面において、被修飾語が修飾部のあらゆる動作の(広い意味での)対象であることをあらわす」ことであると述べている。

但し本稿では、-wo-の有無について詳細には立ち入らず、例文のグロスで連体形内の-wo-をOBJ (objective: 対象)、終止形・接続形内の-wo-をVOL (volitive: 意志)として示すに留める。

2.2 形式名詞 to

形式名詞 to は元来、「場所」や「所以」などを表していた名詞で、中期朝鮮語の段階では実質的な意味を持たない形式名詞である。to 単独で用いられることはなく、必ず助詞やコピュラを伴う。実際には次の(7)のような形態で現れる。

- (7) 主格 ti < to + -i (NOM)
 対格 to-l < to + -l (ACC)
 具格 to-lo < to + -lo (INS)
 コピュラ ti- < to + -i (COP)

本稿ではこのうちの対格形 to-l を調査対象とした(詳細は 3.2 節)。

2.3 中期朝鮮語の名詞形（節）

名詞節は名詞化語尾-womによって作られる。名詞化語尾-womの前にはムード形態素が来ることはない。名詞化語尾には他にも-kiや-tiがあるが、-kiは中期朝鮮語においてはほとんど使われておらず、-tiはelyep-（難しい）、sulho-（悲しい）などの支配を受けるといった特徴がある（高永根 2010: 366）。

3. 調査

3.1 調査資料

調査資料には、『月印釈譜』（1459年）と『法華経諺解』（1463年）の2つの文献を用いた。それぞれの文献については既に詳しい論考があるため、本稿では李浩権（1987, 1993, 2001）を参考に簡略にまとめる。

『月印釈譜』は『釈譜詳節』⁵（1447年）と『月印千江之曲』⁶（1447年）を合わせたものである。合本とする際、『釈譜詳節』の章の構成に変更が加えられている。現存初刊本は巻一、二、七～十四、十七、十八の12巻であり、それぞれの張数は、52張、79張、80張、104張、66張、122張、130張、51張、74張、81張、93張、87張である。本稿では初刊本全巻を調査対象とした。

『法華経諺解』は、刊経都監で翻訳・刊行された全7巻からなる仏教諺解である。諺解の底本となっているものは、Saddharma-puṇḍarīka-sūtra（「正しい教えの白蓮」の意）の漢訳經典のうち、姚秦の鳩摩羅什が漢訳した『妙法蓮華経』について、宋の温陵戒環が要解した7巻28品本である。『法華経諺解』には明の一如が撰集した「法華経科註」も合本されているが、翻訳は経の本文と戒環の要解部分のみである。本稿では巻二～七を調査対象とした。

ここで中期朝鮮語文献の文体について触れておく。志部昭平（1990: 432）によると、訓民正音創製後の文献に於いて、朝鮮語は「諺解体」という特殊な様式をとって現れる。これらに現れる朝鮮語はほとんどが漢文を理解するための補助手段であり、漢文原典に「懸吐」し、それに従って朝鮮語の訳をつけるという、

漢文懸吐文[諺吐文]+朝鮮語訳

という様式で、常に漢文原典に付属した形で現れるのが普通であって、原文としての漢文から独立して朝鮮語のみで現れるものは非常に少ない。従って、

漢文に「句読点」を付す→それに従って「吐を付す」→漢字について「字釈」（字訓）を付す→これらに基づいて漢文を翻訳する

⁵ 首陽大君（後の世祖）が、世宗の正室である昭憲王后の冥福を祈るため、世宗の命を受けて編纂した釈迦の一代記。『月印釈譜』巻一の巻頭にある「釈譜詳節序」と「御製月印釈譜序」によると、『釈譜詳節』は僧祐の釈迦譜と道宣の釈迦氏譜を合わせたものを諺解したものである。一般の諺解書とは異なり、漢文原文に対訳をつけるという形式ではない点特徴的である。

⁶ 『月印千江之曲』は、献上された『釈譜詳節』をみた世宗が自ら釈迦の功德を称えて編んだ頌歌集である。

という過程を経て導かれた朝鮮語は、漢文原典を読み下した漢文直訳的なもの、逐語訳的な性格を持つものとなり、当時の自然な朝鮮語をどの程度反映しているかということが大きな問題となる。

本稿の調査に用いた文献のうち、『法華経諺解』は漢文逐語訳の性格が強く、『月印釈譜』はそれに比べると口語性が高い。

3.2 調査方法

両文献ともに EXCEL ファイルの KWIC 索引を用いて用例を収集した。収集の対象としたのは、他動詞の目的補語の位置に置かれる補文節である⁷。-wom 名詞節は対格助詞を伴って目的補語になる他に、主格助詞 (-i) や属格助詞 (-oy~uy) などの助詞を伴ったり、コピュラ (i-) を伴って copula complement になることができる。また、助詞やコピュラを伴わない場合も多く見られる。

- (8) a. 菩薩-oy 三界 somos al-wom-i kotho-ni-la [主格]
 菩薩-GEN 三界 尽く 知る-NMLZ-NOM 同じである-DECL.REAL-FNT
 「菩薩の三界を尽く知ることと同じであるのだ」(ws02019a7)⁸
- b. 不得已-non mal-wom-ol 得-ti mwotho-l ssila [対格]
 不得已-TOP やめる-NMLZ-ACC 得る-NMLZ できない-ATTR.IRR BN.COP-FNT
 「『不得已』はやめることを得ることができないということである」(ws18040a4)
- c. 笑-non wuz-wum-i-la
 笑-TOP 笑う-NMLZ-COP-FNT
 「『笑』は笑うことである」(ws17060b3)
- d. khu-mye cyek-wum-uy talwom isywum-un pulhwui
 大きい-SIM 小さい-NMLZ-GEN 違う.NMLZ ある.NMLZ-TOP 根
 cey talo-l sso-i-ni-la [属格, 助詞なし, 副助詞]
 自ら 違う-ATTR.IRR BN-COP-DECL.REAL-FNT
 「大小の違い (lit. 大きいこと小さいことの違うこと) があることは根がそれぞれ違うということであるのだ」(ws13047b5)

一方 to 補文節は、目的補語となるもの以外は、形態上 to 補文節に由来するものであっても中期朝鮮語の段階で既に語尾の一部として文法化しているものが多い。例えば次の (9) は、to 補文節がコピュラを伴って copula complement となったものが文法化して当為のモダリティを表す語尾になったものである。

- (9) 後-ey syangnyey i 経-ul 受持読誦 ho-mye 解脱 書写 ho-lq
 後-LOC 常に この 経-ACC 受持読誦する-SIM 解脱 書写する-ATTR.IRR

⁷ 主格助詞や具格助詞がついた例や copula complement として用いられている例については稿を改めて考えたい。

⁸ 用例の出典は文献名の略号 (『月印釈譜』: ws, 『法華経諺解』: ph), 張次, 表裏 (a, b), 行数の順に示す。

ti-ni-la

TO.COP-DECL.REAL-FNT

「後に常にこの経を受持・読誦し、解脱・書写しなくては行けないのである。(lit. 解説・書写することであるのだ)」(ws17092b7)

このように to 補文節が文法化してできた語尾には他に次のようなものがある（日本語訳は志部昭平（1990）による）。

(10) -nti（してから）、-ntol（したとて）、-koantoy（であるのにどうして）、など

調査の結果得られた用例数は to 補文節が 242 例、-wom 補文節が 916 例の計 1158 例である。

4. 分析—補文述語の偏り

本節では、それぞれの補文節がどのような補文述語の目的補語として現れるかに注目する。補文述語を補文節別・文献別に示したのが表 2 である。紙幅の都合上、表には用例数の上位 20 位までの補文述語を載せた。ws は『月印釈譜』、ph は『法華経諺解』を示す。

表 2 補文述語別にみた各補文節の用例数

to 補文節			補文述語	全体数	-wom 補文節		
ws	ph	割合 (%)			ws	ph	割合 (%)
5	5	5.3	kacolpi-（例える）	189	73	106	94.7
4	7	6.7	nilo-（言う）	163	35	117	93.3
41	74	71.9	al-（知る）	160	15	30	28.1
13	25	24.5	pwo-（見る）	155	29	88	75.5
0	2	2.7	wuyho-（為である）	73	16	55	97.3
6	15	42.0	polki-（明らかにする）	50	10	19	58.0
0	1	2.4	cwoch-（従う）	41	15	25	97.6
2	1	8.3	tut-（聞く）	36	4	29	91.7
3	4	21.9	表 ho-（表す）	32	9	16	78.1
0	0	0.0	ho-（する）	20	20	0	100.0
0	0	0.0	得 ho-（得る）	17	17	0	100.0
0	5	31.3	nathwo-（現す）	16	4	7	68.8
0	1	8.3	phye-（施す）	12	1	10	91.7
6	0	54.5	mwolo-（知らない）	11	5	0	45.5
0	0	0.0	求 ho-（求める）	10	3	7	100.0
0	0	0.0	puth-（つける）、ho-（～という）	9	9	0	100.0
0	0	0.0	neki-（感じる）、因 ho-（因る）	7	7	0	100.0
0	0	0.0	et-（求める）	6	6	0	100.0

結論から先に述べると、全体として-wom 補文節が優勢であり、補文述語の意味タイプにも制限がない。用例数は少ないが、-wom 補文節の補文述語は他に以下のものが現れた（用例の一部）：

- (11) 讚嘆 ho- (讚嘆する), kisk- (喜ぶ), hel- (崩れる), cap- (つかむ), culki- (楽しむ), moch- (終える), nip- (着る), solp- (申し上げる), kuchi- (終える), kulu- (解く), cis- (作る), mal- (やめる), mwotwo- (集める), 勧請 ho- (勧請する), など

一方, to 補文節は主に知覚や知識に関する動詞の補語として現れる。次の 4.1 節では to 補文節をとりやすいこれらの動詞について個別に取り上げて分析する。

4.1 al- (知る), mwolo- (知らない) 類

to 補文節は主に知覚や知識に関する動詞の補語として現れる。特に al- (知る) はその傾向が顕著であり, -wom 補文節よりも高い割合 (71.9%) で現れる⁹。

- (12) a. 性-i 眞常 ho-n to-l al-o-si-ko 惑-i 虚妄 ho-n
 性-NOM 眞常だ-ATTR.REAL TO-ACC 知る-LV-SH-SIM 惑-NOM 虚妄だ-ATTR.REAL
 to-l al-o-si-l ssi-la
 TO-ACC 知る-LV-SH-ATTR.IRR BN.COP-FNT

「性が眞常であることをお知りになり, 惑が虚妄であることをお知りになることである」(ws09012a6)

- b. 外道-to sto kulehoya 生 kuch-wum-ol a-ti mwotho-lssoy
 外道-も また そうする.ADVF 生 終える-NMLZ-ACC 知る-NMLZ できない-CAU
 「外道もまたそうして生を終えることを知ることができないので」(ph7158b8)

一方, 対義語の mwolo- (知らない) は他の補文述語に比べると to 補文節が多いと言えるが, al- (知る) に比べると -wom 補文節の割合が高い (to 補文節 54.5%, -wom 補文節 45.5%)。

- (13) a. wuli-non 眞実-s 仏子-i-n to-l mwol-ta-ngi-ta
 私たち-TOP 眞実-GEN 仏子-COP-ATTR.REAL TO-ACC 知らない-RET.VOL-POL-FNT
 「私たちは眞実の仏子であることを知らないのです」(ws13035b6)

- b. 宮中-ei kyesi-lq cey os hel-wom mwolo-si-mye
 宮中-LOC いらっしやる-ATTR.IRR とき 服 破れる-NMLZ 知らない-SH-SIM
 poy kwopphum-two ep-te-si-ni-ngi-ta
 腹 空く.NMLZ-も ない-RET-SH-DECL.REAL-POL-FNT

「宮中にいらっしやるとき, 服が破れていることも知らず, 空腹であることもなかったのです」(ws08082b6)

⁹ 本稿では調査資料に含めていないが、『諺解三綱行実図』(1481年?)でも al- (知る) は to 補文節のみをとっている。

ところで、『法華経諺解』には mwolo- (知らない) の用例が現れない。これは原文の漢文「不知」が *ati mwotho-* (<知る-NMLZ できない)「知ることができない」と朝鮮語訳されているためであろう。

- (14) nic-wom-ol a-ti mwotho-si-mye 四衆-uykey 恭敬 hwom-ol
 忘れる-NMLZ-ACC 知る-NMLZ できない-SH-SIM 四衆-DAT 恭敬する.NMLZ-ACC
a-ti mwotho-si-mye epsiwum-ul a-ti mwotho-sya
 知る-NMLZ できない-SH-SIM 軽んじる.NMLZ-ACC 知る-NMLZ できない-SH-ADVF

[不知所忘 其於四衆 不知所敬 不知所慢]

「忘れることをご存じでなく、四衆に恭敬することをご存じでなく、軽んじることをご存じでなく」(ph6071b4)

al- (知る) 全体としては *to* 補文節が約 7 割を占めているが、(14) のように否定形になると *-wom* 補文節をとりやすいようである。補文述語が *ati mwotho-* (知ることができない) の例は両文献合わせて 19 例得られたが、そのうち *to* 補文節は 4 例、*-wom* 補文節は 15 例であり、*-wom* 補文節が 78.9% を占めている。*mwolo-* (知らない) にせよ、*ati mwotho-* (知ることができない) にせよ、知識に関する述語が補文述語であっても否定の意味を持つと *-wom* 補文節が現れやすくなると言える。

4.2 nilo- (言う), kacolpi- (例える) 類

nilo- (言う), *kacolpi-* (例える) は *to* 補文節と *-wom* 補文節の両方が現れる補文述語であるが、全体の用例数に比べ、*to* 補文節が著しく少ない。これらの動詞に共通しているのは、どちらも「X は (Y が) Z である / Z することを言うのだ」、「X は (Y が) Z である / Z することを例えているのだ」のように、何かを説明したり例えたりする場合に用いられる例が多いという点である。そのため、用例も本文ではなく割注 (注釈) 部分に集中している。

- (15) *i-non* 威音-*i* *sto* 三乗 nilo-syam-ol nilo-si-ni-la
 これ-TOP 威音-NOM また 三乗 言う-SH.NOM-ACC 言う-SH-DECL.REAL-FNT
 「これは威音がまた三乗を言うことを仰るのである」(ws17081a2)

- (16) 権-*ei* *mekwuluyye* isywom-ol kacolpi-ni
 権-LOC 滞る.ADFV ある.NMLZ-ACC 例える-CAU
 「権に滞っていることを例えているが」(ws13025b5)

引用動詞 *ho-* (～という) も *nilo-* (言う), *kacolpi-* (例える) と同様に主に割注での説明に用いられており、*to* 補文節の例は見られなかった。

- (17) 会-*non* *mwoto-l* *ssi-ni* *pwuthye-skuy* *salom* mwotwom-ol 法会-*la*
 会-TOP 集まる-ATTR.IRR BN-CAU 仏-DAT.HON 人 集まる.NMLZ-ACC 法会-QUOT

ho-no-ni-la

言う-IND-DECL.REAL-FNT

「『会』は集まることであり、仏のもとに人が集まることを『法会』と言っているのである」
(ws02016b6)

nilo- (言う) が補語として to 補文節をとる例を見ると、次の (18) のように、語句説明ではなく、実際の具体的な発話の場面で用いられている。

- (18) a. 迦尸国 救 ho-si-n to-l 比丘-tolye nilo-si-ni
 迦尸国 救う-SH-ATTR.REAL TO-ACC 比丘-DAT 言う-SH-CAU
 「迦尸国をお救いになったことを比丘に仰ると」(ws07007a7)
- b. atokho-n 後世-yey 釈迦仏 towoy-si-lq to-l 普光仏-i
 遙かだ-ATTR.REAL 後世-LOC 釈迦仏 なる-SH-ATTR.IRR TO-ACC 普光仏-NOM
nilo-si-ni-ngi-ta
 言う-SH-DECL.REAL.POL-FNT
 「遙か後世に釈迦仏になられることを普光仏が仰るのです」(ws01003a5)

同じ nilo- (言う) という補文述語であっても、用いられる場所 (本文か割注か)、場面 (注釈か具体的発話か) によって、用いられる補文節が異なることが明らかになった。次節ではこの違いが何に起因するかを考察する。

5. 考察一補文節の命題への態度

本節では、4 節で見てきた補文述語の偏りを「補文節の命題への態度」という観点から説明してみたい。

2 節でも述べたように、to 補文節は「連体形 + 形式名詞 to」という連体節構造を持っており、連体形部分にテンス・アスペクト・ムード (以下 TAM) を表し得る (必須である) が、-wom 補文節はそうではないという違いがある。to 補文節と上位節の時間的關係を見ると、不定法過去時制連体形-n によって上位節よりも前に起こった出来事を表したり (例 18a)、推測法未来時制連体形-l によって上位節よりも後に起こる出来事を表したり (例 18b)、次の (19) のように直説法現在時制連体形-non によって上位節と同時に起きている出来事を表したりしている。

- (19) atol-i elyeWi neki-no-n to-l al-a atol-i-n
 息子-NOM 困難に 感じる-IND-ATTR.REAL TO-ACC 知る-ADVF 息子-COP-ATTR.REAL
kot-ol sowoy al-wotoy
 BN-ACC 甚だ 知る-CNC
 「息子が困難に感じていることを知り、息子であることを甚だ知るが」(ws13019a4)

このように、上位節を基準にして、既に起こったこと、今起きていること、これから起こることを補文節が表す場合は、連体形部分で TAM を示す必要があるため、to 補文節が用いられ、補文

節が表す内容にこうした時間の指定がない、言わば超時間的な場合は-wom 補文節が現れるようである。

更に、to 補文節に TAM を表すということは、補文節の命題内容に対する話者・書き手の態度とも関係があると考えられる。つまり、既に起こった出来事や現在起こっている出来事、そしてこれから起こると話者・書き手が考えている出来事は、話者・書き手にとって事実 (fact) であると言える。4 節で見た補文述語の偏りも、この命題への態度が反映されていると考えられる。例えば、al- (知る) のように、補文節の命題の真偽 (特に真) が積極的に要求される場合は TAM を表し得る to 補文節が用いられる。一方、al- (知る) の否定形 ati mwotho- (知ることができない) や mwolo- (知らない) の場合は、al- (知る) に比べると真か偽かが問題ではなくなる。to 補文節の例が著しく少なかった nilo- (言う)、kacolpi- (例える) は、書き手の命題が事実であることを積極的に示す必要がない (事実であることは決まっている) ため、-wom 補文節が用いられる。但し、nilo- (言う) の場合、具体的な発話場面で用いられる場合は、補文節の命題の事実性が問題となるため、to 補文節が現れることがある。

6. おわりに

最後に本稿での考察をまとめ、今後の課題について述べる。

まず、to 補文節は主に知覚や知識に関する動詞の補語として現れるが、-wom 補文節にこのような制限はない。特に al-(知る)の補語になる場合は to 補文節が用いられる傾向が顕著であるが、一方で否定形 ati mwotho- (知ることができない)、mwolo- (知らない) のように否定の意味に限ると-wom 補文節の割合が高くなる。-wom 補文節が圧倒的多数を占める補文述語 nilo- (言う) は、具体的な発話内容を補文節が表す場合は to 補文節が用いられる。

こうした結果が出た要因として考えられるのは、節の中に TAM が現れる to 補文節を用いることで、補文節の命題が話者・書き手にとって事実であることが示されるという点である。そのため al- (知る) のように真偽 (特に真) を積極的に認める必要がある補文述語は to 補文節をとりやすい。一方、補文節の命題の真偽が問題にならない補文述語 (説明に用いられる場合の nilo- (言う)、kacolpi- (例える) など) は-wom 補文節をとりやすい。

但し、以上の考察は『月印釈譜』と『法華経諺解』という限られた文献で得られた用例から導き出したものであり、更に得られた用例全てに当てはまるものでもなく、あくまで傾向に過ぎない。今後はこの考察が他の補文述語や他の中期朝鮮語文献でどの程度まで一般化が可能か考える必要がある。

参照文献

- 鄭在永 (1994) 「15 世紀国語 uy 先語末語尾 {-wo / wu-}ey tayhan 研究」『Hankukmal yenkwu』 1: 1-113.
 鄭在永 (1996) 『依存名詞 'to' uy 文化化』 Seoul: 太學社.
 許雄 (1975) 『Uli yeysmalpon』 Seoul: Saymunhwasa.
 高永根 (2010) 『Cey 3phan phyocwun kwuke munpeplon』 Seoul: 集文堂.
 李浩權 (1987) 「法華經 uy 諺解 ey 對 han 比較研究」『國語研究』 78.

- 李浩權 (1993) 「法華經諺解」『國語史 資料 woa 國語學 uy 研究』133–144. Seoul: 文学 kwoa 知性社.
- 李浩權 (2001) 『*Sekposangcel uy seci wa ene*』Seoul: 太學社.
- 李崇寧 (1960) 「Volitive form uloseuy Prefinal endings ‘-(O/U)-’uy 介在 ey tayhaye」『震檀學報』21: 107–178.
- Martin, Samuel (1992) *A reference grammar of Korean*. Rutland, Vermont; Tokyo: Tuttle.
- 中島仁 (2002) 「中期朝鮮語の「-wo-」について」朝鮮語研究会 (編) 『朝鮮語研究 1』65–107. 東京: くろしお出版.
- 志部昭平 (1990) 『諺解三綱行實圖研究』全 2 冊 東京: 汲古書院.

Two Types of Complement Clauses in Late Middle Korean

OSANAI Yuko

Doctoral Student, Tokyo University of Foreign Studies /
Adjunct Researcher, Department of Crosslinguistic Studies, NINJAL

Abstract

This paper aims to clarify the differences between *TO* complement clauses (attributive form + bound noun *TO* / ‘thing’) and *-WOM* complement clauses (nominalized clauses). Based on an analysis of two Late Middle Korean texts, I demonstrate that *TO* complement clauses primarily appear as the complement of predicates dealing with knowledge and perception, especially those containing the verb *al-* ‘to know’. On the other hand, *-WOM* complement clauses have no restriction with respect to complement-taking predicates. I argue that this is because *TO* complement clauses can express tense, aspect, and mood by using the attributive form of the verb preceding the bound noun, while *-WOM* complement clauses do not permit this range of possibilities. In this way, speakers or writers can use *TO* complement clauses to express factivity (or a lack thereof) in the proposition of the complement clause. Thus, factive complement-taking predicates such as *al-* (‘to know’) tend to co-occur with *TO* complement clauses.

Keywords: Late Middle Korean, complement clause, complement-taking predicate, factivity